慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『新エロイーズ』における欲望と規律（１）：「エリゼの庭」にみられる田園詩的主題とその変奏
Sub Title	Le désir et la discipline dans La Nouvelle Héloïse : le thème pastoral et sa variation dans le jardan de l'Élysée
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.47 (2008.) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20080930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『新エロイーズ』における欲望と規律(1)

――「エリゼの庭」にみられる田園詩的主題とその変奏――

井　上　櫻　子

クララン共同体での生活を描いた『新エロイーズ』後半部では、サン＝プルーの欲望を抑圧し、彼を共同体の規律に従わせることは可能か、という問題が物語を展開させる主要な原動力となっている。なかでも第四部書簡 11 において語られるエリゼの庭での散歩のエピソードは、サン＝プルーの共同体へのイニシエーションの過程でことのほか重要なものであるため、多くの研究者が関心を寄せ、さまざまな読解の可能性が提示されてきた[1)]。言うまでもなく、エリゼの庭の描写を当時の文学界における庭園術への関心の高まりと重ね合わせながら論じようとする試みは既にこれまでにもおこなわれてきたものの[2)]、このエリゼの庭という「空間」、そしてそこに存在する事物の描写を田園詩の系譜――とりわけ田園詩の一変容体であり、18 世紀後半のフランスで隆盛を究めたジャンルである描写詩[3)] ――との関連から論じ

1）紙面の都合上、それらの論考のすべてをここに挙げることは不可能であるが、庭の表象の謎解きについては特に小西嘉幸氏の論考を参考にした（「恋愛のジェオポリティクス 『新エロイーズ』＜エリゼの庭＞を読む」、『テクストと表象』、東京、水声社、1992 年、pp.91-153）。

2）Cf. Nouchine Behbahni, *Paysages rêvés, paysages vécus dans* La Nouvelle Héloïse, *SVEC* nº 271, Oxford, The Voltaire Foundation, 1989 ; Guillaume Ansart, *Réflexion utopique et pratique romanesque au siècle des Lumires. Prévost, Rousseau, Sade,* Paris, Lettres modernes Minard, 1999.

3）描写詩の発展に関する研究書としては、É. ギトンの著作が最も網羅的である（Édouard Guitton, *Jacques Delille et le poème de la nature en France de 1750 à 1820*, Paris, Klincksieck, 1974）。É. ギトンはさまざまな描写詩の作品の中でも、ジャック・ドリールの『庭（*Les Jardins*）』（1782 年刊）に焦点を

ようとしたものはいまだ存在しないように思われる。したがって本論考では、エリゼの庭を描き出すルソーが田園詩の伝統をどのように受容し、変容させていったのかという問題について、サン＝プルーの欲望と共同体の規律との相克というこの作品の主題に注目しながら一つの解釈を試みたい。

Ⅰ．エリゼの庭でのサン＝プルーの夢想

物語の展開を逆行することになるが、まずエリゼの庭めぐりのエピソードの終末部にあらわれるサン＝プルーの夢想に注目してみたい。ルソーと夢想という問題系については、これまでおもに『孤独な散歩者の夢想』に考察の焦点をあて、ことにこの作家の孤独な生活への好みや自我の探求といった主題と関連づけられることがほとんどであった[4)]。しかし『夢想』よりも十数年前の 1760 年代初頭、アカデミーの辞典が夢想を「狂気」と定義付け、ドルバックやコンディヤックをはじめとし、ルソーの周辺で活躍していた思想家達の多くが夢想を「妄想」と捉えていた時期に、ルソーが早くも『新エロイーズ』に決定的な形で夢想の快楽を歌い上げているのは注目に値する。しかも 4 例ある「夢想 « rêverie »」のうち物語の筋に直接関係のある 3 例は

当てて文献調査、解釈を進めている。しかし描写詩というジャンルを確立したのはむしろサン＝ランベールの『四季（*Les Saisons*）』（初版 1769 年刊）であるし、このサン＝ランベールの作品に競合するようにして、ルーシェはドリールに先立ち、やはり長大かつ内容に富んだ自然の歌『一年の月々（*Les Mois*）』を公刊している（1779 年）。サン＝ランベールやルーシェの作品は、同時代の文学界、思想界での動向に非常に敏感であった作者の豊かな読書経験の上に成り立つ作品であり、したがってこれらの作品に目を向けることによって、既に多くの研究のなされているルソーやディドロなどの思想家の著作を新たな視点から再読することが可能になるというのが論者の見解である。

4）このような視点からルソーの夢想について論じたものは枚挙にいとまがないが、このような研究の方向性を作った M. レーモンの著作とごく最近の M. クロジエの論考を一読すれば、ルソーと夢想という問題系が、いかにルソー神話の影響の下、読むことの多様性を否定されたものであるか明らかになるだろう。Marcel Raymond, *Jean-Jacques Rousseau. La Quête de soi et la rêverie,* Paris, José Corti, 1962 ; Michèle Crogiez, *Solitude et méditation. Études sur les* Rêveries *de Jean-Jacques Rousseau,* Paris, Champion, 1997.

すべて、サン＝プルーによってクララン共同体の中で享受されるものなのである[5)]。サン＝プルーはエリゼの庭での夢想を振り返り、エドワード卿にこう語っている。「私は心地よく夢想しました……」[6)] 自然の中ではなく、共同体の中での夢想とは、そしてサン＝プルーを甘美な夢想へと誘うエリゼの庭の機能とはいかなるものなのか。

ヴォルマール夫妻に導かれ、エリゼの庭の全貌が明らかになった翌日、サン＝プルーはかつての恋人ジュリの手になる庭に身を埋め、庭の事物を鑑賞しながらその創造主ジュリの姿を密やかに想起して楽しむためにただ一人で散歩に出かける。「私が目にするもので、彼女の手が触れていないものは何もないでしょう。彼女の足が踏んだ花々の上に接吻することでしょう。朝露とともに、彼女が吸った空気を吸うことでしょう。」[7)] エリゼの庭の事物を描き出そうとしながら、サン＝プルーはいつしか恋人ジュリの身体、彼女の息づかいのイメージをそこに重ねてゆく。生い茂った木々によって隔絶されたジュリの庭の奥へと密かに侵入してゆくサン＝プルーの高揚を描いたこの一節は、教え子であり恋人であるジュリの寝室へと足を踏み入れ、彼女の衣服を目にしたエタンジュ家でのサン＝プルーの強い欲望の高まりを描いた書簡（第一部書簡 54）と図式的に酷似してはいないだろうか[8)]。

このようにエリゼの庭へのサン＝プルーの孤独な散歩のエピソードは、共同体の秩序に反抗する彼の危険な欲望の高まりを第一の動機として展開され

5）以下の拙論を参照のこと。「『新エロイーズ』における夢想の道徳的機能」、『仏文研究』、京都大学フランス語学フランス文学研究会、第 33 号、2002 年、pp.15-32。

6）Rousseau, *Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, dans *Œuvres complètes* t. II, 1964, Paris, Gallimard, « la Bibliothèque de la Pléiade », édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond（1959-1995, 5 vol.）, p.487. 以下、ルソーの引用についてはこの版を典拠とし、*O. C.* と略したうえ、巻号はローマ数字で示す。綴りは現代のものに直すこととする。

7）*Ibid., O. C.* II, p.486.

8）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre LIV, *O. C.* II, pp.146-147.

ることとなる。実際、彼がこの朝の散歩において願っていたことは、「［彼を］かくも不幸にしたあらゆる社会の不自然な秩序を［彼の］記憶から追いやること」[9] である。サン＝プルーの快楽の探求は、ここでは明らかに社会の秩序と対立するものとして示されている。しかしエリゼの庭に足を踏み入れるやサン＝プルーの心に甦るのは、あれほど渇望した恋人ジュリの姿ではなく、彼に対するヴォルマールの諌めの言葉である。「あなたのいる場所を尊重するようにおなりなさい。ここは美徳の手によって設けられた場所なのです。」[10] このヴォルマールの言葉によって、サン＝プルーは急激な内的変貌を経験することとなる。なるほどサン＝プルーはジュリの庭で彼女の姿を思い起こす。しかしそれは過去のジュリの姿、つまりクララランの外の記憶ではなく、現在のジュリの姿、つまりクララン共同体での生活の記憶なのである。

> 私は快楽のイマージュを求めてきたところに徳のイマージュを見たように思いました。このイマージュは私の心の中でヴォルマール夫人の顔立ちと混じり合い、私は帰還してから初めてジュリがいないときに彼女を見たのですが、それは私にとってかつてそうであったような彼女、そして私がいまだにそのように好んで思い描いているような彼女としてではなく、毎日私の目の前に立ち現れるような彼女としてなのです。（中略）私は彼女の脇に厳格なヴォルマール、あの深く愛され、大変幸せで、またそうあるにふさわしいご主人を見ました。私は彼の鋭く正しい判断力を備えた目が私の心の奥底を見抜き、そのことで私は顔が赤くなるように思いました[11]。

ヴォルマールの目に心の内奥を見抜かれることでサン＝プルーは「顔が赤くなるような気がした」という表現から、ヴォルマールの視線に対する意識は、

9）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, *O. C.* II, p.486.
10）*Ibid.*, *O. C.* II, p.485.
11）*Ibid., O. C.* II, p.486.

サン＝プルーが共同体の規律に目覚める契機となっているのが分かる。サン＝プルーは夢想を通して他者との関係を想像力によって捉え、「無垢と誠実さの織りなす光景」と調和をなすべく、内面の感情を秩序立てる。サン＝プルーのこの精神的次元での変貌こそ、共同体での夢想を特徴づけるものだと言えよう。

ところでサン＝プルーの描き出すヴォルマールの表象は、ジュリの回心を物語る書簡において、彼女が認識したと語られる神の表象と非常に似通っている。

> 私は彼の鋭く正しい判断力を備えた目が私の心の奥底を見抜いているように思いました。« Je croyais voir son œil pénétrant et judicieux percer au fond de mon cœur »
> 全てをみそなわす永遠の目が（中略）今私の心の奥底を見ているのです[12)]。
> « […] l'œil éternel qui voit tout […] lit maintenant au fond de mon cœur »

神とヴォルマールのこのような描写の類似から、ジュリが啓示を通して神を源とする自然の道徳的秩序への志向としての「秩序への愛」に目覚めるのと同様、サン＝プルーもまた、夢想を通してヴォルマールを源とする共同体の道徳的秩序への志向としての秩序への愛に目覚めると分かる。サン＝プルーがただ一人で散歩に行った時、すなわちヴォルマールが不在の瞬間に、このように「心の奥底を見るヴォルマール」の表象がサン＝プルーの中に内在化されるというのは示唆的である。そして夢想の中でサン＝プルーがジュリのイメージと融合してゆく時、彼は子供たちに囲まれた母としてのジュリのイメージに対して心を開いてゆくこととなる[13)]。前日は受け入れがたかった共同体の中でのジュリの立場を、サン＝プルーは夢想の中で内発的に受け入れるようになるのである。

12）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Troisième Partie, lettre XVIII, *O. C.* II, p.354.
13）*Julie ou La Nouvelle Héloïse,* Quatrième Partie, lettre XI, *O. C.* II, p.487.

ここでサン＝プルーの内的変貌が彼の自我といかに融和されうるかという問題を検討するため、エリゼの夢想について振り返るサン＝プルー自身の言葉に注目してみたい。

> 私は心地よい夢想を味わうことが出来ました。私は期待していたよりもずっと心地よく夢想しました。私はエリゼで二時間過ごしましたが、この二時間は私の人生の他のいかなるときにも勝るものです。どれほど魅惑的に、そしてどれほど急速に、二時間が過ぎ去ったかということを知って、私は正しい考えを瞑想することには、悪人の決して知ることのない一種の幸福があることに気づきました。それは、自分自身と交わるのを楽しむという幸福です[14)]。

この一節にはディドロの「一人でいるのは悪人だけ」というかの有名な言葉に対するルソーの強い意識がみてとれるが、それは純然たる「自己愛」の称賛の一節と結論づけることは出来ないと考えられる。「正しい考えの省察」をもって初めて「自分自身と交わるのを楽しむ」ことが出来るということから、夢想を通して目覚める「秩序への愛」という道徳的感情が、「自己愛」と相容れぬものではなく、むしろ相補い合うものであることがうかがわれる。引用冒頭にあるように、サン＝プルー自身、「期待していたよりも心地よい」夢想だったと納得しているが、彼が享受するこのような精神的快楽は、彼が夢想を通しての内的変貌を自らにより益になるものとして内発的に受け入れる要因となっていると考えられる。一人散歩に出かけたときは、「あらゆる社会の秩序」に対して反抗的であったサン＝プルーは、かくして共同体の規律を守りながら快楽を享受する可能性を発見するのである。

14）*Ibid.*

Ⅱ.「ありのままの自然」と欲望
――なぜエリゼを変貌の「場」として選ぶのか――

それではなぜ、ルソーはエリゼの庭をサン＝プルーの道徳的変貌の「場」として選んだのだろうか。ここで、エリゼの庭に関する書簡の冒頭にも、「夢想」という言葉が現れることに注目してみたい。

> この心地よい隠れ家を歩き回れば歩き回るほど、そこに立ち入った時に覚えた甘美な感覚がいや増してくるのを感じました。しかしながら、好奇心のために私は息をつくことが出来ませんでした。私は事物の印象を吟味するよりも、事物を見ることに夢中になり、考えようと努めることなく、この魅惑的な観想に身を委ねたいと思ったのです。しかし、ヴォルマール夫人が私を夢想の世界から引き出して、腕を取ってこうおっしゃいました。「あなたがごらんになっているものはみな、活動しない、植物の織りなす自然に過ぎませんが、そのような自然はどうしても常に悲しませるような孤独の念を残します。活動をし、感受性を持つ自然を見にいらしてくださいな。そこでは、一日の一瞬一瞬に新しい魅惑を見つけることでしょうよ。」[15)]

エリゼにはじめて足を踏みいれたサン＝プルーは、さまざまな植物の織りなす風景、自然な様子で流れる人工の小川を目の前に、ありのままの自然の中にいるかのような幻想を抱き、夢想の世界へと没入してゆく。この夢想の内容が、彼の欲望をかき立てかねない危険なものであることは、香りの高い草花、つる性の植物など、性的なコノテーションをもつ植物が提示されていることのみならず[16)]、小説の第一部、ジュリの部屋での「快楽の一夜」へとつながる一連の書簡の最初のものに目を向けることでも明らかになるだろう。その書簡とは、第一部書簡 36（ジュリからサン＝プルーへ）とそれに対す

15）*Ibid., O. C.* II, p.475.
16）*Ibid., O. C.* II, pp.472-474.

るサン＝プルーの返答（書簡 38）である。

牧場を流れる小川の岸に沿って、低木や心地よい林が並んでいます。生い茂った木々の向こうには、もっと人気のない、薄暗い隠れ家があります。

この魅惑的な隠れ家を覆う深い木陰には、
かつて牧人も農夫も近づいたことがない

そこではいかなる場所においても人間の技も手もその不安を抱かせるような仕業を見せることはありません。至るところで万物の母の優しい心遣いの跡しか見られないのです。あなた、人はそこでは完全に万物の母の庇護の下にあるのでして、その法に耳を傾けるだけでよいのです[17]。

ジュリが恋の隠れ家として提示するのは、エリゼの庭のように生い茂った木々によって外界と隔絶され、「ありのままの自然」が残る秘密の地である。このような「隠れ家」のイメージをジュリから差し出されたサン＝プルーは、嬉々としながら二人の逢い引きの場について思いをめぐらし、彼女への返信において、より具体性をもち感覚に訴えるような「隠れ家」のタブローを提示する。

かつて人の目はかくも魅惑的な林をみたことがなく、
かつて西風はかくも青々とした葉むらをそよがせたことはない

田園はよりいっそうにこやかに、緑はいっそうみずみずしく生き生きと、空気はいっそう清らかに、空はいっそう静かに思われます。鳥たちの歌

17）*Julie ou La Nouvelle Héloïse,* Première Partie, lettre XXXVI, *O. C.* II, p.113. 引用されている韻文はペトラルカの『カンツォンエーレ』より。

声はいっそう優しさと愛欲を抱くかのように思われます。小川のせせらぎはいっそう恋の悩みをかき立て、花咲くブドウは遠くまでいっそう甘い香りを漂わせます。魔法のような密やかな魅惑があらゆる事物を美しくしているか、あるいは私の五感を魅了しているのであり、まるで大地が身を飾り、あなたの幸せな恋人のために彼が崇める美しい人にふさわしい、そして彼を焼き尽くす炎にふさわしい初夜の床を整えているかのようです[18)]。

ジュリから差し出された人里離れた「隠れ家」に、サン＝プルーは新たに葉むらの鮮やかな緑、透き通った空の青といった生き生きとした色彩性と、「やさしさと愛欲を抱くかのように思われる鳥の歌」という耳に心地よい音楽的要素を付け加える。さらに小川のせせらぎを「恋の悩み」をかき立てるものと形容し、「ブドウの花」の香りたつさまを描き出す。このように田園生活の愉楽を語るにあたり、サン＝プルーは古代以来、五感のうちで人間の理知的営為に最も近い感覚とされる視覚に与える感興を歌い上げることから始めて、「鳥の歌」、「小川のせせらぎ」といった聴覚的イメージを介し、甘い花の香り、すなわち外界の刺激をより直截的かつ受動的に受け取る感覚とされる嗅覚に訴える快へと到達する。そして最後にさまざまな感覚を楽しませる魅惑的なこの地を「初夜の床を整えているかのようだ」と喩えながら、微笑みかけるような春の野を描き出すエクリチュールにシャレーでの快楽の一夜への高まる期待を重ね合わせてゆく。

このような隔絶された「秘密の隠れ家」を描くにあたり、ルソーが田園詩の伝統を踏まえていることはペトラルカの引用が繰り返されることからも明らかであるが、ここで注目すべきは「求愛する鳥」のイメージがサン＝プルーによって加えられていることであろう。田園詩の伝統において「求愛する鳥」のイメージは、恋の炎を燃え上がらせる重要な要素であり、サン＝ランベールなどの描写詩の諸作品を一読すれば、そのような鳥のイメージがルソ

18）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Première Partie, lettre XXXVIII, *O. C.* II, p.116. 引用されている韻文はペトラルカの『セスティーナ』より。

ーの同時代人にも引き継がれていることが分かる。

われわれの目の前、この生い茂った林の奥、
この蒼穹の上、この川のほとりで
鳥たちはかくも甘美な感情を抱き活発に動き回る。
見よ、彼らがその恋人たちに熱心に尽くすさまを
燃えるような目をし、羽を小刻みに震わせ、
世話をしたり、歌を歌ったりしてその見返りを求めるさまを
悦びを与え、愛を得ようとするさまを[19]。

これは、サン＝ランベールの『四季』「春」からの一節であるが、興味深いのは雄の鳥たちが雌鳥の愛を勝ち得ようと懸命になる「場所」は、やはり「生い茂った林の奥」とされている点であろう。詩人は鳩、雀、白鳥などの求愛するさまを詳細に描いてみせた後で、動物たちが享受する一過性の肉体的快楽と対照させつつ、人間の普遍的な愛から得られる幸福を惜しみなく賛美するに至る。「あらゆる動物が恋に燃え上がり、つがいとなり、また恋に燃えようとする。／万物が欲望し、快楽を得る。愛することが出来るのはただ人間のみである。／（中略）鳥たちの愛は春が去れば果てるもの。／より恵まれた人間においては、愛はいかなる時も生き続ける」[20] つまり、鳥たちの恋の描写は、万物が再生する野において恋に落ちる若者たちという主題を導きだす上で不可欠な要素なのである。

したがって田園詩の伝統を踏まえれば、「秘密の隠れ家」を恋人ジュリに差し出され、そこに思いを馳せつつ「求愛する鳥」の表象を加えるサン＝プルーのエクリチュールには、彼の欲望の高まりが色濃く現れていると言えよう。エリゼの庭に対するサン＝プルーの第一印象も「生い茂った木々により外界と隔絶され、ありのままの自然の残る秘密の場所」であり、第一部書簡36、38 で提示される「秘密の隠れ家」のイメージと酷似している。サン＝

19）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Le Printemps », 1769, p.25.
20）*Ibid.,* p.27.

プルーの欲望の問題について論じられる際、特に考察の対象となってきたのは、先にも挙げたジュリの寝室での快楽の一夜のエピソードであるが、そもそも二人が逢い引きの場として思い描いていたのは、人里離れた場所にある「シャレー」である。したがって「ありのままの自然」という幻想を払拭できずに、エリゼの植物に囲まれサン＝プルーが楽しむ夢想が、欲望をかき立てるものであるのは言うまでもなく、だからこそジュリはサン＝プルーを現実世界へと引き戻すべく生物のいない空間から生き物たちのいる場所へと誘うのだと考えられる。

さらに田園詩の伝統を踏まえれば、なぜジュリが現実に引き戻されたサン＝プルーに他ならぬ「鳥のイメージ」を提示するのか、しかも、「求愛」の場面を割愛し、家族愛、共同体の成員としてのイメージを重ね合わせたかという理由も明らかになるだろう。

> 「ああ、あなたはもう何もご覧になれませんわ」とジュリさんは言いました。「めいめいがもはや自分のことしか考えていないのですもの。かたときも離れることの出来ない夫婦、熱心に家庭の世話をするさま、父性愛と母性愛、こういったものをあなたはみなご覧になり損ねたのです。(以下略)」[21)]

一見田園詩の伝統を継承しているかに見える「エリゼの庭」において、自然の秩序の中で守るべき位置を守り、激しい愛欲ではなく、「夫婦愛」、「父性愛」、「母性愛」といった穏やかな家族愛を抱く鳥の表象を示すことは、サン＝プルーを共同体の成員へと変貌させるべく、彼の欲望を抑圧するうえで必然の道であり[22)]、かくしてルソーは自己の道徳思想、人間論に見合うも

21）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, *O. C.* II, p.477.

22）実際、この鳥の表象を示されたサン＝プルーは、ヴォルマールを「かつての恋人の夫」としでではなく、「(のちに彼が家庭教師となることを予定されている）子供たちの父」と認識し始め、二人は友愛の念によってことになる。鳥の表象の提示とサン＝プルーの心境の変化については、小西論文（前掲書

のにすべく、古代テオクリトス以来継承されてきた田園詩の重要なイメージを変容させているのだと言える。またさらに付言するなら、ルソーが欲望と自然の秩序との相克という主題について論を展開しながら、求愛する鳥という田園詩の伝統に想を得た表象を自己の人間論に合致させるべく変奏させるのは、「エリゼの庭」に関する書簡が初めてではない。『ダランベールへの手紙』において最も重要な議論、すなわち、羞恥心は社会の慣習や教育により、後天的に獲得されるものであるとするディドロに反論し、それが生得的感情であることを立証する議論の中に既に確認されるものなのである。ルソーはここで羞恥心が人間に固有のものであるとしながらも、そのような感情を備えることがいかに人間の自然＝人間性に適ったあり方であるかということを示すべく、動物においては本能が羞恥心の代わりをすると主張するのだが、そのことを立証すべく提示するのが、あらゆる類の動物のなかでほかならぬ鳥の求愛の場面なのである[23)]。ここでルソーは雌鳩が本能的に媚態とゆるやかな拒絶の態度とを巧みに織り交ぜながら、雄鳩の愛を勝ち得てゆくさまを描き出している。のちにルーシェはその描写詩『一年の月々』の「五月」の歌の注において、『ダランベールへの手紙』の一節を引用しながら、恋に目覚める鳥を描き出すルソーの筆致の秀逸さに深い称賛の念を示すこととなるが、このような事実もまた、ルソーの同時代の読者には彼の提示する鳥の表象が、田園詩の系譜との連続性を想起させるものであったと同時に、彼の筆致がいかに強い印象を与えるものであったかということの傍証となるであろう[24)]。

クラランの秩序を模するものであるにもかかわらず、一歩足を踏み入れただけの人間にはありのままの自然のような幻想を抱かせる「エリゼの庭」。この庭を変貌の場と選んだのは、第一部におけるサン＝プルーの強い欲望を喚起するのが、やはりありのままの自然を残す閉ざされた空間であったこと

---

pp.115-124）に詳しく論じられている。

23）*Lettre à d'Alembert sur les spectacles*, *O. C.* V, pp.79-80.

24）Roucher, *Les Mois,* « Remarques sur le troisième chant », Paris, Quillau, 1779, t. I, pp.189-190.

と密接な関係を持つと考えられる。ところでクラランの共同体が舞台となる第四部以降、この小説の前半――とりわけ第一部――において確認された多声的構造はすっかり影をひそめ、この共同体での生活を報告する書簡は一貫してエドワード卿を名宛人とし、サン＝プルーによって執筆されることとなる。またそのようなサン＝プルーの手紙は、少なくとも表面的には共同体の管理システムを称賛することを目的として綴られており、親しき友との気の置けぬ語らいに耳を傾けるというよりは、あたかも欲望の露呈と共同体の規律の相克を命題としたディセルタシオンを読んでいるかのような印象を受ける。「エリゼの庭」に関する書簡は、そのような緊張感を最も端的に示したものの一つであると言えよう。この書簡の後半部では、先に述べた平和な家族愛を抱く鳥たちの叙述を境に、「ありのままの自然に見せかける」ことのできる人工の庭、エリゼを造り上げる術とこの庭の有用性について無邪気に問いかけるサン＝プルーと、それに応えるヴォルマールとの対話が展開されることとなる。それは、一見当時の庭園術への関心の高まりを踏まえた美学的考察と見せかけながら、サン＝プルーが当初抱いていた「ありのままの自然」という幻想を捨てるように促し、彼に自然の秩序を模する共同体が個人に与える充足感について納得させるための一過程をなすものと考えられる。

Ⅲ．エリゼの庭における二つの「自然」
――「ありのままの自然」と「自然の秩序」――

サン＝プルーが「ありのままの自然」と誤認する要因となったエリゼの庭の植生についての叙述においては、プレイアッド版にして1ページあまりにわたって香り立つ花々やつる性の植物の名前が列挙される[25)]。「エリゼの庭」に関する書簡の冒頭に位置し、ルソーの作品の中では例外的に具体的かつ詳細なこの植物の描写は、一見すると当時フランスに導入されたばかりのイギリス風の庭園術への関心の高まりを踏まえ、読者の好みに合致させるべく、エリゼの植生の「多様さ」を強調しているかに見える。しかしこの書簡

25）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, *O. C.* II, pp.472-474.

の後半部に展開される庭園術についての対話の中では、むしろ当時のフランス文学界でもてはやされたイギリス風の庭園や、中国風の庭園は、多大なる財を注ぎ込んで人工のなせるわざの痕跡を消し去ろうとするがために、かえって不自然なものになっているとして手厳しく非難される[26)]。

「わたしは、中国であなたがお求めになるような庭園を見たことがあります（中略）。そこには、井戸の水しかないような平坦な砂地だというのに、人工の岩や洞窟、滝があり、中国と韃靼のあらゆる地域から珍しい草花が同じ土地に集められて栽培されていました。（中略）自然は限りなく多様な様相を呈していましたが、全体としては全く自然な感じがしませんでした。」[27)]

「それ［＝ストウにあるコバム卿の庭園］は、非常に美しく、絵のような場所を寄せ集められたものなのですが、それらの風景は異なった地域から選ばれたもので、一つ一つはみな自然に見えるのですが、それらが集まると、先に話した中国の庭園のように不自然なものになるのです。」[28)]

ここでルソーはサン＝プルーの言葉を借りて、視覚的、物理的には「ありのままの自然に見える」庭を創出しているかに見えるが、分不相応なほどに財を注ぎ込み、物質的次元での自らの要求を満たすことを果てしなく追求する人間の行為が、いかに「人間の弱さ」を想起させ、「自然の秩序」を守ることから逸脱したものであるかということを強調している[29)]。このようなルソーのあり方は、サン＝ランベールがやはりイギリス式庭園術への同時代人の関心の高まりを踏まえながら、自らの純然たる美学的関心事を追求すべく、『四季』の「春」の歌に関する注の中で次のように主張するのとは対照的で

26）*Ibid.*, *O. C.* II, pp.480-485.
27）*Ibid., O. C.* II, p.484.
28）*Ibid.*
29）*Ibid., O. C.* II, pp.484-485.

ある。

> 主な特徴は、彼ら［＝イギリス人や中国人］が、まず自分たちが装飾せねばならない土地の状況と種類を検討することである。彼らは驚くべきほどに山、岩、急斜面、森、生い茂った林、急流、川、小川、滝、谷、丘といったものの効果を知っているのだ。これらのさまざまな自然の形態をその土地の状況や種類の要請にしたがって、そのコントラストをはっきり際立たせたり、混ぜ合わせたり、引き離したりすることによって、彼らはその庭にそれをみるあなたの心にある印象を与えたり、ある感情をかき立てたりする力を与えるのである[30)]。

サン＝ランベールは時に相矛盾するようなさまざまな自然の諸相を提示するイギリス式、中国式庭園の与える快楽について論じるにあたり、単に当時の文学界で示された議論を要約している訳ではない。彼は、イギリス人、中国人の造る庭園が見る者に与えるのは何よりも「驚き」の念であるとし、バークの崇高論を援用しながら独自のコントラストの美学に見合う形で庭園術についての見解を示そうとするのである[31)]。

ところでサン＝ランベールがイギリス式庭園を支持する考察を提示する際、自ら支持する美学、人間論を礎としているように、ルソーもまた庭園のあるべき姿について論を展開する際、基盤とするのは独自の人間論なのである。そのことは、多くの金銭を費やして造られる中国やイギリスの庭園が「人間の弱さ」を感じさせるがために批判されるのであれば、「人間の弱さ」を感じさせない庭園とはいかなるいかなるものか、と問いを立て直してみると明

30）Saint-Lambert, *Les Saisons*, Notes sur « le Prinmtemps », Clérmont, Imprimerie de Pierre Landriot, 1814, t. I, pp.62-63. この注は、1769 年の初版にはなく、1771 年の改訂版において挿入されたものである。

31）以下の拙論を参照のこと。「サン＝ランベールによるバークの受容とフランス詩学改革の試み」、『人文知の新たな総合に向けて』、京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第 5 回報告書下巻、2007 年、pp.125-146。

らかになるだろう。

> なにものも人の意見に委ねられることがなく、あらゆるものが実際的な有用性を備え、自然の真の要求だけにとどまる事物の秩序は、ただ理性によって認められるだけでなく、目と心を楽しませる光景を提示するのであって、その中においては、人間はたえず心地よい関係のもとにあり、あたかも自己充足しているかのようであって、人間の弱さの姿はまったく現れず、このような楽しい光景は決して悲しい考えをかき立てることはないのです[32)]。

これはクララン共同体の家政に関する第五部書簡 2 からの一節である。「自然の真の要求だけにとどまる事物の秩序」という表現から、クララランの秩序は自然の秩序と合致することが分かる。また、「目と心とを満足させる」という表現からは、クララランの秩序は視覚を満足させるだけでなく、心情に訴えかけるものであることがうかがわれる。クララランの秩序の美は、それに惹き付けられ、その秩序の中にわが身を位置づけようとする人々に、その本性の弱さを忘れさせ、あたかも神のような精神的自己充足感を与える。かくして素朴な田園生活を営みながら、贅をつくした生活からでさえ得られぬような充足感を享受することがいかにして可能なのかという問題を出発点として、人間の社交性の主題にまで議論が発展するのであるが、ここで興味深いのは、『夢想』に現れるような自己充足感という表現が、既に『新エロイーズ』において、しかも人間の社交性を強調する文脈において現れているということであろう。多額の財を注ぎ込んで造られる庭と自然の供する多様さを保持する散歩道との二項対立は、小説の筋を逆行して跡づけるならば、クララランの家政に関する書簡に示されるこのような豪奢な生活と素朴な生活との二項対立の延長線上にあることが分かる。すなわち、庭園術についてのヴォルマールとの語らいは、それとはっきり示されないものの、サン＝プルーにエリゼ

32）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Cinquième Partie, lettre II, *O. C.* II, p.547.

の美とそれがもたらす快に備わる社会的有用性を、ロゴス（言語＝理性）を用いて説得する過程であると考えられる。そして、そのような対話の果てに、「これ［＝エリゼの庭］は、余計な気晴らしの場所だ」[33] と無邪気かつ不用意に言い放つサン＝プルーは、自らの内的変貌に際して大きな役割を果たすこの庭の機能にまだ何も気づいていないのである……。

したがってヴォルマール夫妻との散歩の翌日、サン＝プルーが享受する「心地よい夢想」は、彼が言語、理性を介しては理解できなかったエリゼの機能を感情レヴェルで納得する場面であると言えよう。この夢想は、サン＝プルーの「彼女が名付けた隠れ家と同様、彼女の心の奥底にも平安が支配しているのだ」[34] という言葉で締めくくられる。サン＝プルーは、夢想を通して、エリゼの庭がその創造者であるジュリの道徳性を模倣していること、すなわち、ヴォルマールの「この庭は徳の手によって作られたものなのです」という言葉の正しさを納得するが、それは同時にエリゼの秩序立てられた自然をありのままの自然と誤解するサン＝プルーを諭す、ジュリの次のような言葉を納得する瞬間でもある。「確かに、自然がすべてを創ったのですが、それは私の指導の下に行われたのです。そこには私の秩序づけないものは何一つありません」[35]。エリゼの秩序の美は、サン＝プルーの心の中で共同体の秩序の源としてのヴォルマールのイマージュと重なる。サン＝プルーの孤独な散歩において、「危険な夢想」が回避され、より大きな快楽を与える「共同体の表象」の夢想によって置き換えられることは、彼が去勢され、不在の折にもヴォルマールの「視線」をたえず意識することを余儀なくされるクララン共同体の成員へと変貌するための重要な一段階であると考えられる。

こうして二日目の散歩において、サン＝プルーはエリゼの「秩序立てられた自然」＝「自然の秩序」を規範として奔放な欲望と情念の発露を律することとなり、彼の内的変貌は完成したかに見える。しかし、『新エロイー

33）*Julie ou La Nouvelle Héloïse*, Quatrième Partie, lettre XI, *O. C.* II, p.485.
34）*Ibid.*, *O. C.* II, p.487.
35）*Ibid.*, *O. C.* II, p.472.

ズ』におけるエリゼの庭の機能についてさらに考察を掘り下げようとするとき、エリゼの庭にみられる二つの「自然」イメージ――この庭がまず「ありのままの自然」に見え、また同時に共同体の規律を象徴的に表す「秩序立てられた自然」でもあること――が、この作品全編に通底する「自然」の概念の両義性という問題に通じるものであることが明らかになるだろう。そして、『新エロイーズ』における「自然」の両義性という問題は、欲望と規律との相克というこの作品の主題と密接な関係にあるのだが、そのことを論じるには稿を改めねばならないようである。

（次号に続く）

付記：本研究は平成 20 年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)（課題番号 20720091）の助成を受けたものである。